

哲學研究

第四百四十五號

第十三卷
第四册

所謂認識對象界の論理的構造

西田幾多郎

一

私は認識主觀を離れてそれ自身に於て存在する超越的實在、即ちカントの所謂物自體の如きものが、如何なるものなるかを論じようとするものではない。私はさういふ意味に於ての形而上學者でない。私は何處までも概念的知識自身の自省の立場に立たうと思ふものである。かういふ意味に於て、私はカントの批評主義の途を歩みつゝあるものと信ずる。唯、私は何等の獨斷的假定のない純なる概念的知識自身の立場から出立して見たい。認識論者といへども、その出立點に於て、尙反省すべき獨斷的假定を遺して居るではないかと思ふのである。

知るといふことは認識論の據つて立つ根本概念でなければならぬ。知るとは如何なることを意味するか。普通には、知るものと知られるものとが對立し、知るといふのは一種の作用の如くに考へられる。併し働くといふことは知るといふことではない、我々は働くものをも知るのである。働くとは尙對象と對象との間に於ける一種の關係を意味するに過ぎない。知るものがカント哲學に於ての様に、純なる論理的意義にまで純化せられ、知るといふことは形式によつて與へられた質料を綜合統一することであると考へられても、尙主客の對立とか作用とかいふ意義が全然除去されたとは云ひ得ない。我々は此等の獨斷的立場の殘壘を棄て、尙一度その出發點に還つて深く考へて見なければならぬ。形式によつて質料を構成するといふことから知るといふことは出來ない。知ると云ふには、變するものゝ根抵に變せざるものがなければならぬ、變するものを映すものがなければならぬ。

二

私が或物を見て居る時、私といふものがないとは云はれない。併し私といふものはまだ意識せられて居ない。之を反省して私が何々を見て居たといふ時、その私と

いふのは知られたもので、知るものではない、後の私は前の私と私ならざるものを知つて居る。私が知るといふことは、知られたものが私の意識内に於てあると云ふことを意味するとするならば、眞に知るものは兩者を包んで居ると云ふことができない。私が私を知る、知るものが知るもの自身を知るといふ場合、現在の私がその私自身を對象として居るのである、我に於て我と非我とが對立して居るのである、於てあるもの、と之を包むものが一となつて居るのである。

我々が物を知るといふ場合、知るものと知られるものとが對立する、或意識内といふものが限定せられて、その外といふものが考へられる、物は意識の外に於てあると考へられるのである。併し意識の外といふも、或意味に於て知られたものでなければならぬ、非我も或意味に於て我に於てなければならぬ。全然我の外にあるものに對しては知るといふことはなく、又すべてが全然我の内にあるものゝみならば知るといふことはない。自覺といふことが知るといふことの根本的形式である。單に私が物を見て居たといふ如き場合、私といふものが意識せられてゐないとしても、後に意識してゐたと考へられるのは、やはり右の如き形式に於てあつたと考へられる故でなければならぬ。我と非我との對立及びその統一が明になつてゐないとし

ても、既にかゝる反省の可能が含まれて居なければならぬ。

知るといふことが右の如きものであるとするならば、かゝる意味に於て知るといふことは、如何なるものと考へることが出来るか。知ることを知ることにはできないと云はれるかも知らぬが、苟も知るといふことが考へられる以上、それが如何に考へ得られるか、明にせられねばならぬ。意識せられたもの、せられないものと云へば、對象に屬する目印となるかも知らぬが、知るとか、意識するとかいふことは、知るものと知られるものとの關係でなければならぬ。如何なる關係が知ると考へられるのであらうか。對象化せられた二つの物と物との間の關係に於て、その一が他を知るといふことではない。少くとも同列的なる物と物との關係に於て、知るといふことではない。同列的なる物と物との間に於ては、互に相働くといふことはあるであらう、一つの物が變ずることによつて他の物が變せられると考へることが出来るであらう。併し知るといふことはそれから出て來ない。變ずるものは相反するものに變じ行くこと云はれる如く、變ずるものゝ根抵に變せざるものがなければならぬ。此の如き一般的なるものが對象的に限定し得られるかぎり、變ずるものが考へられるのであ

る。併しかゝるものが判断の主語として對象的に限定せられるかぎり、それは知るものではないのである。色は赤とか青とかいふことができるが、視覺作用は赤でもなければ青でもない。

同列的なる二つの物の關係から、知るといふことが考へられないとすれば、知るものは知られるものに對して高次的なるものでなければならぬ、同列的對象としては考へられないものでなければならぬ。而も知るといふものが考へられる以上、それは單なる無であつてはならぬ。是に於て、自己によつて自己を限定するものとして、知るといふものを考へて見ることができる。併し自己自身を限定するものと云つても、それが何等かの意味に於て知られるものと對象的關係を有するかぎり、知るといふことは云はれない。知られるものに對して、知るものは對象的關係に於ては全然無でなければならぬ、何等の對象的關係に入り込まないものでなければならぬ。非我に對する我は眞に知る我ではない、眞に知るものは兩者を包んだものでなければならぬ。知るものといふものを對象化するとはできぬ、對象化することができれば、それだけ知られたものであつて、知るものではない。既に對象化すべきものではなく、従つて知られるものと對象的關係に入り込むことができなるとすれば、如何にし

て知るものとか、意識するものとかいふものを考へることができらうか。對象といへば、すぐに認識作用の目的と考へられるかも知らぬが、私が此に對象といふのは判断の主語として考へられるものを意味するのである。かういふ方向に於て意識を考へようとすると人は單なる無と考へるの外はない、否意識するとか、知るとかいふ考も出て來ない筈である。單に映すものとか、意識の場所とか考へても、映すものと映されるものとの間、場所と於てあるものとの間には、何等かの關係がなければならぬ。而もそれが對象的關係でないとするれば、かゝる關係は如何に考ふべきであるか。見ることを見ることはないと云ふも、見ることも意識せられ、考へられるのである。

それでは如何にして我々は知るものを考へ得るか、又考へねばならぬのであるか。苟も知識があると考へる以上、知るものといふものが考へられねばならぬ。是に於て我々は深く概念的知識自身の構造について反省して見なければならぬ。苟も判断的知識が成立する以上、主語となるものについて述語することが可能でなければならぬ。述語するといふことは、主語が述語に於てあるといふことを意味する、特

殊が一般に於てあるといふことを意味するのである。外延的關係に於ては、判断とは或物が或物に於てあるといふことを意味せなければならぬ。勿論、すべての判断が包攝判断であるといふのではないが、何等かの意味に於て述語可能であるといふことは、主語となるものが述語的なるものに於てあるといふことを意味せなければならぬ。斯くして後、更に種々なる範疇的限定が成立するのである。アリストテレスが本體を根本的範疇と考へたのも斯く解することもできる。併し斯く判断的知識の根柢に何處までも一種の包攝的關係が考へられねばならぬと共に、概念的知識は單なる包攝的關係によつて成立するものではない。眞の概念は抽象的ではなくして具體的でなければならぬ。所謂抽象的概念と考へられるものも、苟もそれが概念的知識として考へられる以上、自己自身の内に特殊化の原理を含んだものでなければならぬ。之によつて判断的知識が成立するのである。

概念は具體的でなければならぬ、然らざれば之によつて知識が構成せられるとは云はれない。併し單に自發自展的なる客觀的原理といふ如きものであるならば、それは尙客觀的にある一種の有であつて概念ではない。概念的知識成立の根柢には、特殊が一般に於てあるといふ包攝關係がなければならぬ。一般者は單に自己自身

を分化發展するのみならず、自己自身の發展を内に含むものでなければならぬ。特殊と一般との關係には自ら判斷の主語と述語との關係を含むと考へざるを得ない。かゝる關係を何處までも推し進めて行けば、所謂主語となつて述語ならざる個物に至つても、尙述語語的一般者に於てあると云ふことができる。かゝる意味に於て何處までも内に判斷的關係を包むものが具體的概念でなければならぬ。かゝる具體的一般者が限定し得らるゝかぎり、所謂對象的知識が構成せられるのである。併し判斷の主語と述語との關係を、何處までも主語的方向に進め行くと考へ得ると共に、何處までも述語的方向に之を包むものを考へることができぬ。主語となつて述語とならないものに反し、述語とならない超越的述語面ともいふべきものが我々の意識と考へるものである、即ち知るものであるのである。要するに具體的一般者の超越的述語面といふものが意識面と考へられるのである。

上に云つた如く、二つのものが同列的に考へられるには、兩者を包む一般者が限定せられて居なければならぬ。而してかゝる一般者が限定せられたものであるかぎり、一が他を知るといふ關係は成立しない、兩者は互に對象的關係に立つのみである。一が他に對して之を包むとか統一するとかいふ如き關係にあるとしても、それが一

つの具體的概念として限定せられ得るかぎり、尙主語的方面に於て見らるゝ對象的關係たるを免れない、知るものと考へられるものすら眞に知るものではない。主語的なるものに對して何處までも述語となつて主語とならないもの、即ち主語的對象としては無といふの外ないが、而も主語的なるものが之に於てあり、之によつて成立するものが、知るものと考へられるのである。

以上述べた如く、我々が意識するものと考へるものと云ふものを考へることが出来るのは、主語的本體としてゝはなく、又何等かの因果關係に於て働くものとしてゝもなく、唯超越的述語面としてのみ考へ得るのである。又此の如きものを考へざるを得ざるのは、判斷が具體的一般者の自己限定と考へられ、知識の客觀性が超越的述語面ともいふべきものによつて立せられるとするならば、判斷的知識の成立する限り、何處までもかゝる超越的述語面が考へられねばならぬ。知るものと知られるものとの關係は、判斷の述語と主語との關係に外ならない。何等かの意味に於て主語的なるものが述語面に於てあるといふことが、知るといふことである。知られるものが知るものに對して外的と考へられるのは、限定せられた述語面の外にある故

である、而もそれが又知るものに於てあると考へざるを得ざるのは、超越的述語面に於てあるからである。唯、超越的述語面が主語化せられて主語面と對立的に見られることによつて、知るものと知られるものと相對立し、その間に一種の作用的關係が考へられるのである。而も上に云つた如く斯く考へられるかぎり、知るといふことは出て來ない。意識を意識するとか、知るものを知るとかいふことは、超越的述語面が自己自身を限定するより起るのである。我々は直に積極的所謂一般概念を限定するといふ意味に於て超越的述語面といふ如きものを限定することはできぬ、唯自己自身の否定を含む一般者として限定し得るのみである。かゝる限定の意義を積極的に現すものは我々の自覺の意識である。具體的一般者に於ても、その否定が含まれて居ると云ひ得るであらう。併しそれが具體的一般者と考へられるかぎり、特殊の否定を含むと言ひ得るも、一般者其者の否定を含むと云ふことはできない。一般者其者の否定を含むもの、即ち自己自身の否定を含むものにして、意識するものを意識すると云ふことができるのである。眞の自覺は自己の中に自己矛盾を含む否定的肯定でなければならぬ。

三

知るものとか、意識するものとかいふものが、唯超越的述語面としてのみ考へ得るとするならば、知るもの、即ち私といふものは、働くものとか、構成するものとか云ふものではなく、概念の外延を限定する一般者の性質を有するものであると云ふことができる。一般者が一般者として自己を限定した時、具體的一般者と考へられるが、更に述語的方面に之を越えたものが、知るものとか、私とか考へられるのである。此意味に於て我とは一種の概念である、逆にすべて概念は知るものであると云つてよい。概念は具體的でなければならぬ、抽象的概念といふのはその不完全なる形に過ぎない、而して知る我といふのは具體的概念を包むものである、具體的概念を更に一般者の方向に超越したものである。所謂抽象的概念といへども、かゝる述語面によつて裏附けられて居るのである。感覺とか知覺とかいふ如き所謂無反省の意識とは斯くして考へられるものである。概念、實在界意識の三つのものは異なつたものとして考へられるが、所謂實在界を具體的概念と見得るならば、三つのものは皆概念の種々なる形と見ることができぬ。

物があるといふのに、色々の意味に於てあると云ふことができる。普通に物があるといふのは、主語としての有即ち主語的有を意味するのである。かういふ意味に於ては、主語となつて述語とならない個物といふ如きものが、最も根本的なる有と云はねばならない。併し私があるといふのは、かういふ意味に於てあると云ふのではない。私は個物的と云つても、主語的有の意味に於ての個物ではない。唯一なるものは自己自身の述語となるものである、自己自身の述語となるものは、單に自己同一なるものに過ぎないが、自己同一なるものゝ述語面が主語的なるものを自己の中に吸込んだと考へられる時、即ち主語が述語の中に没入したと考へられる時、私がある」と考へられるのである。繫辭の「ある」といふことは、一方に於て特殊が一般に於てあるといふことを意味すると共に、一方に於て一般者自身の自己限定を意味せねばならぬ。主語が超越的にして、その述語的統一が成立せないと考へられる時、所謂物的存在が考へられるが、述語面が超越的にして主語的統一が形成し得られないと考へられる時、意識的存在が考へられるのである。自己自身を限定する一般者は當爲の意識といふ如きものと見られ、所謂繫辭的「ある」といふものが考へられるのであるが、之を主語的方向に超越するか、述語的方向に超越するかによつて、二種の有が考へら

れるのである。何等かの意味に於て特殊が一般に於てあるといふことが、判断成立の根本的條件であるならば、意識的存在が判断成立の根柢となるものでなければならぬ。當爲の背後に意識的有がなければならぬ、所謂認識対象は直接に之に於てあるである。

デカルトの *cogito ergo Sum* の *sum* は主語的存在の意味でなくして、述語的存在の意味でなければならぬ。その我は何處までも考へる我であつて、考へられた我であつてはならない、如何にしても判断の主語的方向に於て見ることでできないものであつて、而も主語的なるものはすべて之に於てあるものでなければならぬ。かゝる意味に於てあるものは、真に内在的として明白なるものと云ひ得るであらう、何となれば自己自身が知識成立の根本的條件となるが故である。而して之と同じく直接にして明白なるものは存在せなければならぬ、自己は尙自覺的意識の対象として述語面的限定たるを免れないが、絶對に超越的にして、所謂自覺的なるものも之に於てあるといふべきものは、更に直接にして明白なるものと云はねばならぬ。かゝる意味に於て、神は自覺と同じく、否之にもまして直接に且つ明白にして且つ勝義に於て存在すると云ひ得る。神は *quod in se est* と共に *quod per se concipitur* でなければな

らない。デカルト學派の人々は神を主語的有と考へたから、所謂形而上學に陥つたのである。

或物が私に意識せられて居るといふことは、それが右の如き超越的述語面に於てあるといふことを意味するのである。述語面が超越的となればなる程、之に於てあるものは判断の主語として限定する事のできないものとなる、即ち主語的統一の成立し難きものとなる。是に於て、之に於てあるものは、すべて時間的なるもの、事實的なるものに分解せられねばならない。かゝる方向の極限に於てもはや主語として統一することのできないもの、換言すれば、唯、否定的にのみ限定し得るものが私に意識せられたものである。故に意識の事實は流れ去るものでなければならぬ、而してかゝる事實と結合する我は一瞬の前にも還ることと云ひ得るのである。

意識せられるものと意識するものとは、同一の場所にあるものではない、意識は何處までも超越的述語面である。單にかゝる意味に於ては、私に意識せられて居るといふ意識もない。此の如き超越的述語面が自己自身を限定した時、即ち所謂自覺の意識が成立つた時、私に意識せられるといふことが意識せられるのである。かゝる場合、一般者其者の中に主客の對立が成立し、兩者の關係が考へられるのである。述

語面が超越的となるに従つて、主語的方面に見られた個物が働くものとなり、更に超越的述語面其者の自己限定、即ち直に之に於てあるとして、所謂知るものとなるのである。超越的述語面に於てあるもの、すべて對象的なるものは、此點に關係を有たねばならぬ、此點を中心とせなければならぬ。かゝる關係が私に意識せられると云ふことである。此點は何處までも主語的方向に於て見ることはできない、即ち對象化することはできない。此意味に於ては無である、而も此點によつてすべての内容が統一せられ、すべてが内在的として此點から直に行くことと考へることができるのである。

四

私は所謂概念を以て直に眞實在とか又知るものとか考へるのではない。併し苟も概念的知識の立場から物を考へる以上、意識とか眞實在とかいふものも、何等かの意味に於て概念的知識の構造と關係を有つて居なければならぬ。眞に直觀的なものは知ることができないと云ふも、既に或意味に於てかゝるものを知つて居なければならぬ。加之かゝるものが知識の根柢として考へられるならば、如何にし

て然考へられるか、明にせられねばならない。逆に私は概念的知識をば直觀的なもの、自己自身を見るものの不完全なる形と考へるのである、弱き直觀と考へるのである。併し我々は概念が作られて居る材料から作られて居る、直觀の淡き影といへ、概念的知識の立場に立つものは、概念的知識自身の自省から出立せなければならぬ。

普通に概念といへば、類と種との關係から成る抽象的概念といふ如きものが考へられるのであるが、かゝる關係はそれ自身に於て完全なるものでなく、それ自身に於て理解せられるものでない。我々は判斷の主語と述語との關係を離れて種と類との關係を理解することはできない、種と類との關係には自ら主語と述語との關係が含まれて居ると考へることができぬ。判斷は客觀的對象を志向するによつて判斷となる、判斷を判斷たらしめるものは客觀的對象でなければならぬ、判斷の根柢は客觀的なる或物に於てあるのである。之を主語となつて述語とならない個物的本體と考へることもできるが、判斷の主語として述語可能なるには既に何等かの意味に於て一般的性質を帯びたものと云はねばならない。判斷の眞の主語は却つて一般的なるものにあると考へることができぬ、是に於て判斷は一般的なるもの、自己限

定となる。斯くして具體的一般といふものが考へられるのである。

右の如き意味に於ての具體的一般者といふ如きものは、單なる主語的統一として考へられる本體といふ如きものとは異なるとしても、かゝる一般者の自己限定として考へられるかぎり、尙意識作用としての判断を明にすることはできぬ。一つの具體的一般者として限定せられる以上、それは又主語的に考へ得るものでなければならぬ、考へられたもので考へるものではない、之より判断の主觀性は出て來ない。かゝる判断作用を内に包むものは、述語となつて主語となることなき超越的一般者でなければならぬ。判断作用といふのは、かゝる一般者の限定として考へられるのである。

自己自身を理解する概念は、少くも具體的一般者でなければならぬ、所謂抽象的一般概念といふ如きものは、その不完全なるものに過ぎない。併し具體的一般者の根底には、之を包む超越的述語面即ち意識面がなければならぬ、斯くして始めて眞に具體的といふことができ、自己自身を理解すると云ふことができる。併し述語面が超越的であるといふことは、もはやそれを對象的に考へられぬと云ふことを意味する、之について對象的知識が成立せないと云ふことを意味する。是に於て我々は

所謂概念的知識の世界を越えて直觀の世界に入るのである。斯く具體的概念の一方に抽象的概念が考へられ、他の一方に超越的述語面として意識面といふものが考へられるのであるが、具體的概念の中に於ても判斷的一般者と推論式一般者とを區別することができ、自己の中に自己の主語を包むものを判斷的一般者とすれば、更にかゝる一般者を包むものが推論式的一般者である。概念の特殊と一般との關係を押し進めて行けば、所謂抽象的概念に於ては眞に主語となつて述語とならない個物的なるものを包むことはできない、判斷的一般者に至つては之を内に包むといふことができる。併しそれは尙對象的個物である、尙一種の一般者に於て限定せられたものである、未だ自己自身を限定するものではない。自己自身を限定するもの、知るものを包むものは、更に之を越えたものでなければならぬ。推論式的一般者に至つて、漸く自覺的なるものを包むと云ふことができる、反省的對象界といふ如きものが考へられるのである。小語面と大語面との對立が主觀と客觀との對立を表し、媒語面によつて兩者が結合せられて、一つの一般者を構成するのである。主觀と客觀とを包む一般概念はないと考へられる如く、無論それは單なる判斷の根抵となる判斷的一般者といふ如きものではない。併し媒語的統一によつて一つの推論式的

限定が成立するかぎり、私はその根抵に尙限定せられた一種の一般者を考へ得ると思ふ。こゝまでを概念的知識といふことができる。之を越ゆれば超越的述語面の世界、即ち直觀の世界に入るのである。而して翻つて見れば、此等の段階は超越的述語面の自己限定の段階に過ぎない。抽象的概念より具體的概念への内面的要求は、裡面から見れば知るものゝ要求である。

具體的概念を推論式的一般者の形にて考へるならば、繫辭は媒語となり、媒語は時の意義を有つて居る。媒語的なる時の種々なる意義を考へることによつて、所謂主觀界、客觀界等種々なる世界の區別、關係を明にすることができる。種々なる作用といふのも、媒語的なる時の變形に過ぎない。更に推論式的一般者をも包む具體的一般者を考へることによつて、直觀の世界と概念の世界との關係を明にすることができる。かゝる一般者に於てあるもの、即ち小語的存在に對しては、もはや大語面的限定を成立しない、有るものは時に於てあるものでなく、却つて時を含むものである。

五

私は所謂主客の對立をも概念的知識の構造の内に於て考へ、抽象的概念から直觀

に至るまで同一の型によつて考へようとするのであるから、所謂合理的なるものと非合理的なるものとの對立をも、普通考へられる如く相反し、相對立するものではなく、すべての概念的知識の構成的要素として考へたいと思ふ。逆説の様ではあるが如何なる概念にも合理的部分と非合理的部分とが含まれて居る、すべて超越的述語面に於てあるものが非合理的と考へられるのである。故に我々に對して與へられると考へられる非合理的なるものは、すべて主語面と述語面とを繋ぐ媒語的なる時を通じて與へられるのである。唯、知るといふことを作用的關係となす考から出立して、その背後に之を包む超越的述語面を見ないから、合理的と非合理的とが相對立するのである。

我々が此物として考へるものは、經驗的に與へられたものとして非合理的と考へられる。併し我々が之について何等かの判斷を下す以上、それは何等かの意味に於て一般的なるものに於てあると考へねばならぬ。判斷が一般なるものゝ自己限定と考へるならば、斯く考へざるを得ない、非概念的なるものは概念的となるとは考へられないことである。唯、かゝる一般者が超越的述語面にして限定することができないと云ふに過ぎない、それは推論式的、一般者を越えたものであることを意味する

のである。それで、何處までも主語的統一として成立せない超越的述語面自身の直接の限定ともいふべきである。我々の自覺的意識に於て與へられるかぎり、かゝる一般者に於てあるものに就いても判断的知識が成立するのである。自己意識といふものが成立するかぎり、事實的判断が成立するのである。自覺的意識に於て現れるものが眞に時間的なるものであり、時の範疇によつて非合理的なるものが概念化せられるのである。而して我々の自覺的意識といふのは、唯述語となつて主語とならない超越的述語面の自己限定としてのみ考へ得るのである。或は如何にして超越的述語面といふ如きものが考へ得るかど云ふでもあらう。我々は主語と述語とを結合して何は何であるかと云ふ時、判断的知識が成立するのであるが、更にかゝる抽象的一般者を越えて、一方に主語となつて述語とならない、即ち主語に附着して述語面に達せない判断を考へることができるとすれば、一方に述語となつて主語とならない、即ち述語に附着して主語面に達せない判断といふ如きものを考へることができ。私があるといふ自己意識は普通に考へられる如き事實の意識ではなく、かゝる述語となつて主語とならない判断を意味するのである。述語不完成の判断に對して主語不完成の判断を意味するのである。判断が一般者の限定として成立し、判断の

根抵に一般者がなければならぬとするならば、私があるといふことによつて判断が成立すると云はねばならぬ、私が知るとは概念的であるといふことを意味するのである。

經驗的事實の知識が右の如き意味に於て概念的と考へ得ると共に、合理的と考へられる數學的知識の如きものであつても、全然非合理的なるものを含まないのではない。數學的知識の根抵に直覺があると考へられる如く、その内容は超越的述語面に於て與へられるものでなければならぬ。唯その述語面が又主語面的に限定することができ、所謂同一判断の兩面の如き形を成すが故に、その所與は單に概念の外延といふ如きものに過ぎない無内容なる對象と考へられるのである。而して主語面と述語面とを繋ぐ媒語的なるものは、所謂時の如きものではなくして、云はゞ過現、未が一前に收縮せられた如き時である。従つて經驗的知識に於てその限本的條件となる如き自己意識は、數學的知識に於てはその必要でない、唯判断を包む思惟意識といふのみにて十分である、數學的對象は純粹思惟の對象と考へられる所以である。併し數學的知識といへども單に抽象的思惟によつて考へられるのではない、その内容を與へる一般者は何處までも超越的でなければならぬ。

六

我々の知識は「私がある」といふことから始まる。併し私があるといふことは物の知識でもなければ、事實の知識でもない。又眞に知るものはカント哲學に於て考へられる綜合統一の主観でもない、超越的述語面が自己自身を限定することである、自己の中に自己を認めることである。超越的述語面の自己の中に自己を認めるとは何を意味するか。特殊が一般に於てあり、その一方が主語として一方が述語として判断によつて結合せられたもの、即ち特殊と一般との關係に主語と述語との關係を含めたものを眞の概念とするならば、判断の主語的方向に於て何等かの意味に於て主語的統一が成立するかぎり、對象的知識が成立するのであるが、主語的方向に於て主語的統一として成立せない無限に深い主語的なるものを見た時、我々の自覺の意識が成立するのである。前に之を單なる述語的統一と云つたが、それは主語的なるものがないといふことを意味するのではない、特殊を含まない一般とは云はれない、自己の中に無限に深い主語を含むといふことである。意識作用から云へば、無限に深く自己の中に自己を志向すると云ふことである、故に對象として考へられ

ない對象が自己である。一般者が自己自身を限定するといふことは、何等かの意味に於て自己自身の中に主語的統一を見ることである。無論、自己自身を限定せない一般者はないのであるが、達縱すべからざるものにしても、兎に角主語的有を意味するものが見られるかぎり、その一般者は限定せられたものとして、之に於て概念的知識が成立するのである。判斷的知識は述語的一般者の限定によつて成立すると考へるならば、我々の知識は實に私があるといふことから始まるのである。(數學的知識の如きものであつても、純粹思惟の我といふ如きものがなければならぬ。それは個人我といふ如きものではないが、限定せられた一種の超越的述語面といふことができる。)

私の超越的述語即ち無の場所といふものは、自己の中に無限に深い主語的統一を見るものである。此故に自ら無にして自己の中に自己の影を映すと云ふことができ。而してその中に映された、達することのできない主語的統一が、我々の所謂自己と名づけるものである。かゝる自己の内容が何等かの意味に於て限定せられるかぎり、一般者が限定せられ、之によつて所謂概念的知識が成り立つのである。併し我々の眞の自己は尙深い所にあるのである。超越的述語面其者に於てあるのである。主

語的統一の意味を絶したものである、意志するもの、否自己自身を見るものが眞の自己である。此故に眞の自己は概念を絶した世界に於て住むのである、主語的統一の成立せない世界に於てあるのである、而してかゝる世界が我々に最も直接な世界である。この世界の底には何物もない、我々の底に知的對象の世界があるのではない、所謂實在の世界は眞に我々の住む世界の表面に過ぎない。我々はこの深い、否最も直接なる世界に於て喜び悲しみ、直に相知り相交はるのである。此世界の内容は主語的統一の世界、即ち所謂概念的知識の世界に現すことはできない、唯象徴によつて表し得るまでいある。

併しかゝる超越述語面に直接なる世界について語ることは之を後日の論文に譲り、今は唯何等かの意味に於て主語的統一の成立する概念的知識の世界について論ずることゝしよう。抽象的概念は普通に述語的と考へられるのであるが、逆に述語面の主語的に限定せられたものとして主語的と云ふこともできる。述語面が主語的に限定せられたものと考へられるかぎり、所謂抽象的概念が構成せられるのである、種と類との關係とは單に判断の主語となるものゝ關係である。判断の眞の主語は綜合的全體にあるとも考へ得る、斯く考へられれば、却つて具體的一般者といふ如き

ものが判断の主語となると云はねばならぬ。併しかゝる意味に於て主語と考へられるものは、私の所謂超越的述語面であつて、單なる判断の主語ではない。かゝる述語面が自己自身の中に自己を限定したものが、所謂判断の主語となるのである。而してかゝる意味に於て限定せられたものは、何處までも抽象的たるを免れない。

抽象的なる一般概念が判断の述語となると考へられる、赤が色であるといふ時、色といふ如きものが抽象的一般概念と考へられる。併しかゝる一般概念が限定せられるのは、更に大なる一般者に於て限定せられねばなるまい、それは更に大なる述語面に於て主語的に限定せられたものである。唯之をその中に含まれたものに比して、一般的と考へられるのである。何故に種は類に比して一層具體的と考へられるか。それは個物的なるものに近づくこと云ふことでなければならぬ。而して個物的なるものは私の所謂超越的述語面に於てあるものである、最後の種に到るといふことは眞の一般者に到ることである。かゝる秩序を限定するものは一般者其者でなければならぬ。眞に判断の述語として判断を成立せしめるものは、所謂抽象的一般者ではなくして超越的述語面でなければならぬ。特殊を中に含むと考へられる一般者は所謂抽象的一般者でなくして既に具體的一般者でなければならぬ。抽象

的なるものは、却つていつでも具體的なるものゝ中に含まれるものなければならぬ。

抽象的概念が具體的一般者に於て如何なる位置を取るかに就いては、後に説く所によつて明となるであらう。「十」の終に於て此問題に觸れて置いた。抽象的概念は述語面の直接に限定せられたものといふ意味に於ては、無論述語的と云ふべきであらうが、それが主語的に限定せられたものといふ意味に於ては主語的と云ふことができる。具體的概念即ち判断的一般者といふ如きものにあつては、その述語面は既に超越的といふべきものであつて、主語となつて述語とならない個物的なるものを此面に於て含むと云ひ得るも、此面自身が直に主語的に限定せられ得ることは云はれない。かゝる判断的一般者に於て、その述語面が主語的に限定し得られるかぎり、或は主語の統一が成立するかぎり、その面が抽象的概念となるのである。無論、抽象的概念の中に含まれた抽象的概念に對しては、前の抽象的概念は述語となり、後の抽象的概念は主語となる、類と種との關係が成立するのである。かゝる意味に於ては、抽象的概念は主語ともなり述語ともなるものである。要するに、抽象的概念とはまだ自己自身の媒介を含まない一般者である、判断を單に潜在的に含む不完全なる判断的一般者である。

七

主語面が、述語面に於てあり、判断によつて両者が結合せられる、述語面の主語的限定が判断となるのである。述語面自身の主語的限定の形式が所謂範疇であつて、之によつて種々なる判断が成立するのである。故に判断の根柢には私といふものがないければならぬ、超越的述語面其者を直に現すものは私の意識である。無論、私の意

識といふも必ずしも私といふものが意識せられて居ることを要しない。考へられる自己から、考へられない自己に至るまで、すべてを含んだ意味の私の意識である。かゝる意識面に於て主語的に限定せられたものが、すべて抽象的概念である。概念は自己が自己の中に映す自己の影である。判断は主語面と述語面とを繋ぐものであるが、判断が主語面に附着してその縁暈をなすと考へられる場合は、抽象的概念と考へられる。之に反し判断が述語面に附着しその中に含まれたものと考へられた時、具體的概念と考へられるのである。

それで種と類との關係に於て統一せられる所謂抽象的概念と云はれるものは、すべて主語面に於てあるものである。種と類との關係は主語面的統一である。無論、それも超越的述語面に於てあるものであるが、その間に媒語的なるものが見られない時、一方に主語面的統一が成り立ち、一方に述語面的統一が成り立つのである。此の如き意味に於て見られる超越的述語面が、我々の直覺的意識と考へるものである。而してその實はかゝる述語面に於てあるものが抽象的概念に内容と關係とを與へるのである。抽象的概念の關係には、一方にいつもかゝる直覺面が豫想せられねばならぬ。元來超越的述語面其者は論理的には限定のできないものでなければなら

ぬ。併し述語面は主語面を内に含み、主語的に自己を限定するが故に、一方に主語面的限定が成立すると共に、一方に自覺的立場に於て述語面自身の限定が考られるのである。所謂直覺的意識と考へられるものは、自覺的意識と同一の面に屬するものであるが、未だ自覺的意識の如く自己自身を媒介せないものである。

種と類との關係には自ら主語と述語との關係を含み、かゝる概念的關係の背後に之を包む超越的述語面がなければならぬ、之によつてかゝる關係が成立するのである。唯、媒語的なるものが隠れて居るから、主語的に限定せられた類概念、アリストテレスの所謂第二本體の如きものが、直に超越的述語面の役目を演ずる如くに考へられるのである。併し眞の概念は自己の中に主語を有ち、自己自身を媒介するものでなければならぬ、私の所謂判斷的一般者でなければならぬ。特殊と一般との關係に主語と述語との關係を含め、かゝる關係を何處までも押し進めて行けば、主語的方向に於て主語となつて述語とならない個物、即ちアリストテレスの第一本體の如きものに到達すると共に、述語的方向に於て述語となつて主語とならないものが見られねばならない。而して後者が前者を包むと考へられなければ、個物についての判斷は成立せないのである。判斷的一般者に至つて、始めて超越的述語面といふ如きも

のが見られねばならぬのである。

超越的述語面其者は主語的に限定せられるものではない、併し主語的に自己を限定するが故に述語面である。述語面に於て主語的限定が成立するかぎり、所謂概念的知識が成立するのである。超越的述語面は自己自身の中に自己同一なるものを含むことによつて、自己自身を限定する、主語的方向に自己同一なる個物を見ることによつて、自己自身を限定するのである。第一本體としての個物といふ如きものは、直に超越的述語面に接觸して居るものでなければならぬ。此故に却つて抽象的一般者の立場からは、主語となつて述語とならないと考へられるのである。而して自己同一なるものにして始めて超越的述語面自身の直接の限定と云ひ得るが故に、之によつて範疇的限定が成立する、之を主語として種々なる種類の判断が成立するのである。併し判断的一般者に於ては、尙推論式的一般者に於ての如くに媒語的なものは現れない。唯自己同一なるものに於ては、主語と述語とが同一であると云ふことによつて、両者が結合せられるのである。自己同一なるものは超越的述語面自身の限定として、自己自身を媒介する端緒を開くのである。超越的述語面たる私は先づ同一なるものとして自己を媒介し自己を限定するのである。

抽象的概念を統一するものは、背後より之を包む超越的述語面であり、抽象的概念の體系とはその主語面に於てあるものゝ統一なるが故に、反對とか矛盾とかいふ如き概念と概念との關係もかゝる立場から考へて見ることが出来る。概念を包む概念、即ち述語的一般者が主語的に限定し得るかぎり、所謂包攝的關係が成り立つ。し或一つの概念とその否定的概念とは之を包む主語的概念はない、我々は肯定と否定とを含むものを主語として考へることはできない。併し我々が或物とその否定的なるものを區別する以上、この兩者を包むものがなければならぬ。而してそれは既に述語となつて主述となることなき超越的述語面の性質を有つたものでなければならぬ。アリストテレスの變ずるものとはかゝるものゝ自己限定に外ならない。かゝるものに於ては、もはや主語的統一の成り立たない、唯超越的述語面自身の直接限定たる私といふ如きものが基礎となつて、肯定と否定とを包むものが考へられるのである。變ずるものが考へられるには、所謂私といふものゝ反省がなければならぬ。或一つの限定せられた一般概念から出立して、その特殊化の極限に於て、主語となつて述語とならない個物といふものを考へることが出来るであらう。而してそれは直に超越的述語面に於てあると云ふことができる。併し斯くして尙變ず

るものと云ふものは考へられない、變するものはかゝる極限をも越えたものでなければならぬ。超越的述語面が自己の中に自己を限定するに當つて、個物的なるものを越えても、尙主語的なるものを考へ得るかぎり、變するものといふ如きものが考へられるのである、而して更にかゝるものをも越えたもの、生滅するものが考へられる。矛盾するものは全然主語として統一することのできないものである。

八

特殊と一般との關係に主語と述語との關係を含め、かゝる關係を何處までも押し進めて行けば、一方に主語となつて所謂述語とならない個物に達すると共に、一方に之を包む超越的述語面といふ如きものが考へられねばならぬ。單なる判断の主語的統一によつて成立する概念的知識は、此の上に出ることはできないであらう。併し判断は主語によつて成立するのではなく、述語的一般者の自己限定によつて成立するのである。判断的知識の成立する前に、所謂主語的統一の成立せぬ超越的述語面の直接の限定といふ如きものがなければならぬ。一方に主語となつて述語とならないものを考へ得るならば、一方に述語となつて主語とならないものを考へ得

るのである。「私がある」といふのはかゝる判断的知識を表すものでなければならぬ。すべての判断的の知識の根柢には私があるといふ如き限定がなければならぬ。單に主語的限定を中心とする判断的一般者に於ては、尙かゝる超越的述語面自身の直接なる自己限定が明にならないまでである。

超越的述語面の直接なる自己限定とか、主語的統一の成立せない述語的統一とか云つても、私は主語的統一がないと云ふのではない。述語面が自己自身を限定すると云ふことは、自己の内に主語的なるものを見ることである、述語的なるものはいつても主語的に自己を限定するのである、所謂判断はかゝる限定の一種に過ぎない。唯無限に深い超越的述語面は、自己の内に所謂判断の主語として限定のできない、無限に深い主語的なるものを見るのである。私があるといふことは、かゝる意味に於て主語的限定の一種である。私といふのは元來意識の外に又はその底に考へられた形而上學的實在ではない、又心理學者の考へる如き一種の現象でもない。主語的統一として成立せないものを主語とすることによつて、自己自身を限定する超越的述語面の直接なる自己限定として論理的に考ふべきものである。自己同一なるものに至つて、主語的なるものが超越的述語面に撞着したと云ひ得るでもあらう。併し

私といふのはかゝる自己同一なるものを内に包んだものである。自己同一なるものに於ては、主語と述語とが合一すると考へることができ、尙述語が主語的に限定せられると考へることができ。私の意識に於ては、唯自己の中に自己同一なるものを見るのみである。述語面と主語面とが相離れて、主語は達すべからざるものとなる點に於ては、抽象的概念に類するが、抽象的一般者に於ては、外に超越的なるものを見、自覺の意識に於ては、内に超越的なるものを見るのである。自己自身の中に自己の影を見るのである、自己自身の影を自己の中に映すことによつて自己を限定するのである。論理的には矛盾とも云へよう、併しかゝるものが、我々に最も直接なるものである。論理的知識も之によつて成立するのである。述語面の主語的限定の極限として、かゝる自覺的限定が成立するかぎり、尙概念的知識の世界が構成せられる。我々が判断的一般者を越えて、尙推論式的一般者に於て成立する概念的知識の世界を有し得るのは、かゝる限定に基くのである。

推論式的一般者に於ては、小語と大語とが對立し媒語によつて結合せられて、一つ的一般者を成すのである。小語的なるものは特殊的なるものであり、主語的なるものであり、大語的なるものは一般的なるものであり、述語的なるものである、媒語的な

るものは判断的一般者に於ける判断に相當するのである。小語的なるものと大語的なるものとが相對立し、小語的なるものが直に大語面に於てあるのではないと考へられることによつて、推論式的一般者が判断的一般者から區別せられるのである。然らざれば、主語が直に述語的一般者に於てあるものとして、判断的一般者と異なる所はない。推論式的一般者に於て主語的意義を有する小語的なるものは、單に主語となつて述語とならない個物的意義を有するのみならず、所謂主語的統一として成立せないと云ふ意義を有するものでなければならぬ、主語的統一の成り立たない述語的統一、超越的述語面の直接なる自己限定の意義を有するものでなければならぬ、即ち自覺的意識に於てあるものでなければならぬ。逆に云へば、自覺的意識といふものがあつて、超越的述語面が反省せられ、之によつて推論式的一般者といふ如きものが構成せられるのである。例へば、歸納法的一般者に於ても、自覺的意識に於て承認せられることによつて、特殊なる事實が一般的意義を有するのである。數學的知識の如きものについて尙詳論を要するが、數學的知識の成立するにも直接所與の意識がなければならぬ。而してすべて直接所與の意識は超越的述語面の直接なる自己限定として、一種の自覺と考へることができるのである。

それでは大語的なるものは如何なるものではあるか、推論式的に於ける大語面とは何を意味するか。それは推論式的に於ける小語面的に、即ち主語的に自己自身を限定することによつて現れる述語的限定でなければならぬ、超越的述語面の抽象的限定に外ならない。判断的に於て我々は個物について述語する時、換言すれば判断的に於て自己自身を限定する時、述語として現れるものは抽象的概念であつて、個物についてその部分的性質を現すものである。推論式的に於て個物的主語より更に深い主語的なるもの、即ち私といふ如きものによつて自己自身を限定する時之に對して述語的なるものとして現れるものは、判断的に於ての如く抽象的概念ではなくして、判断的に於て普通に具體的概念と考へられるものである。推論式的に於て大語的なるものは、その限定として判断が成立する判断的に於ていふ如きものでなければならぬ、而してそれは推論式的に於て超越的述語面の抽象的限定と考へらるべきものである。推論式的に於て判断的に於て一般者を包んだものである、判断的に於て一般者である。普通の形式論理學に於て考へられる如き推論式は、單に類と種との包攝的關保を重ねたものに過ぎない、推論式的に於て一般者の意義のみならず判断的に於て一般者の意義も有たないのである。

すべて一般者は主語的限定によつて自己自身の内容を見、判断は一般者が自己自身を見る過程である。推論式一般者は小語的限定によつて自己自身の内容を現す、即ち自覺的意識の成立によつて自己自身の内容を見るのである。自覺的意識によつて小語面的内容が限定せられると共に、之に對して大語面的なる對象界が成立し、嘗て「知るもの」に於て論じた様に、媒語的なる「時」によつて推論式的一般者が自己自身の内容を現すのである。我々の世界といふのは斯くして成立する推論式的一般者の内容に過ぎない。我々の自己といふのが見る眼といふ如きものであり、世界は時によつて自己自身を顯現するのである。是故に我々は種々なる主觀の立場によつて種々なる世界を見ると云ふことができる。自覺の種々なる意義によつて種々なる意義の小語面が限定せられ、所與の範疇たる「時」の内容が種々に考へられるに従つて種々なる認識對象界が構成せられるのである。何處までも主語とならない、唯自己の中に無限に深い主語的なるものを見るもの、即ち超越的述語面其者の直接限定とも考ふべき私といものが定まることによつて、超越的述語面の内容が限定せられるのである。かゝる限定が所謂範疇的限定と考へられるものであり、かゝる自己が所謂認識主觀である。普通に自覺といふのは、單に知的自己の自覺を意味して居る、

考へられるものが考へるものであると云ふことである、單に思惟作用の兩端の結合を意味して居る。併し知るものは單に働くものではなく、働くものを包んだものである。私といふのは自己の中に無限に深い主語的なるものを包むもの、逆に云へば超越的述語面の直接の限定として主語的なるものと云ひ得るならば、自覺其者に無限に深い階段を見ることができ、考へるとか、知るとかいふ作用は時間的なるものゝ於てある推論式的一般者に於て考へられるのであつて、かゝる一般者の超越的述語面に於てあるものが我々の所謂自覺である。考へるとか、知るとかいふものが考へられるもの、知られるものとして、一旦對象的に限定せられ、而もそれが直に考へるもの知るものであるとして、之を包む超越的述語面自身の直接限定と考へられるのである。それが如何なる意味に於ても苟も範疇的に限定せられ得るものを包み、之を成立せしめる述語面として、主語的統一の成立せない超越的述語面の直接なる自己限定即ち自覺の意識と考へられるのである。所謂認識主觀とはかゝるものを意味するに外ならない。併しかゝる意味に於ての自覺は尙對象的認識に即して考へられる自覺である、全然主語的なるものを自己の中に没し去つた自覺ではない。眞の自己は意志する自己、見る自己でなければならぬ。所謂自覺を超越するが故

に自己を失ふとも考へられるであらう。併しかゝる意味に於て自己を失ふ時我々は眞に自己を得るのである、所謂自覺は眞の自己の影像に過ぎない。是故に我々は無限に深い自己を見ることによつて、無限に深い世界を見る。意志的自覺の立場に於ては、此世界は創造の世界であり、見る自己の立場に於ては此世界は象徴の世界となる。全然主語的限定を超越した超越的述語面の内容は主語的なるものをすべて一種の象徴たらしめるのである。

九

私は種と類との關係に主語と述語との關係を含め、かゝる關係を何處までも押し進めて行つて、苟も概念的知識として成立するものは、すべてかゝる形式に於て成立すると考へるものである。而してかゝる關係をその底から見れば我々の自己が自己自身を限定することである。自己とは論理的に云へば無限に深い主語的なるものを含む述語面である、所謂主語的統一の成立せない述語的統一を意味するのである。かゝる述語面に於て判斷的知識が成立するのである、概念的知識の底には更に深い深い底があり、何處までも深いものに通すると考へられるのは之によるのである。

る。私は今概念的—般者に於て主語的方向と述語的方面との兩端を結合する媒介的なるものに就いて考へて見よう。

判斷とは主語と述語とを結合するものである、主語が述語に於てあることを意味するのである。主語的なるものが、その於てある述語面に觸れ得るかぎり、判斷が成立する、述語面が主語的に自己自身を限定すると云ふことができる。私の判斷的—般者といふのは、かゝるものを意味するのである。併し概念的知識を自覺的限定と考へ得るならば、之と異なつた種々の概念的知識が成立すると考へることができ。判斷的知識としては或は不完全とも云ひ得るであらう。併し自覺的限定から見れば、所謂判斷的知識はその特殊なる一つの形に過ぎない。一方には、主語的統一が主となつて超越的述語面が隠れて居るもの、無論述語面なくして概念的知識は成立せないが、述語面が又主語的に限定し得ると考へられるもの、即ち之に對して述語面の直接なる自己限定の見られないものが考へられると共に、一方には、超越的述語面の直接なる自己限定の上に立つて、却つて主語的統一が成立せないと考へられるもの、無論主語的限定なくして概念的知識は成立せないが、自己の中に無限に深い達することのできない主語的なるものを見るもの、即ち述語面が自己自身を主語とす

るものどを考へることができ。而してその間に尙種々の階段を見ることができ
るであらう。

超越的述語面が未だ自己自身の限定に達せない時、即ち主語的に限定せられるも
のが述語的一般者となる時、抽象的概念の體系が成立する。眞に特殊と一般とを媒
介するものがその中に含まれて居ないから、單に特殊は一般に於てあるものと考へ
られる。特殊と特殊との間、特殊と一般との間を結合するものは單なる關係といふ
如きものに過ぎない。述語面的限定が蔽はれて居る時、主語的なものと主語的なも
のどを結合するものが所謂關係である。元來、類と考へられるものも、その實特殊と
對立的に考へられるものである。共に主語的に限定せられ、比較せられるものである。
斯く考へれば、類が種を含むといふことすら云へない、唯それが超越的述語面を代表
するものとして、種が類に於てあるとか、類が種を含むとか考へられるのである。併
しそれは未だ超越的述語面の限定せられたものであつて、自己自身を限定する超越
的述語面其者ではない。是故に抽象的概念の關係に對しては超越的述語面の直接
の限定として知覺的意識といふ如きものがなければならぬ、而してそれは自覺的限
定に於てのみ考へられるのである。例へば二つのものを主語的對象として見るな

らば、赤は色であるといふこともすら云ひ得ない。赤が色であるといふことは赤は色といふ一般者の自己限定であると云ふことを意味して居なければならぬ。唯一般者が自己自身を媒介せない時、即ち單に主語的に限定せられて述語的媒介者が潜在的である時、種と類との如き關係が成立するのである。かゝる意味に於て考へられる一般者といふのは、最も内包の少ない單なる外延的一般者と云ふの外はない。

右の如く主語的統一に傾いた概念知識が考へられると共に、述語的統一に傾いた概念的知識といふべきものが考へることができる。「私がある」といふ命題によつて現される概念的知識がそれである。私といふのは判断の主語として考へることのできないものである。主語として限定し得るものなら、それは既に私といふものではない。然らば、私といふのは主語とならないものであらうか。一方から云へば、却つて眞に主語となつて述語とならない主語と云ふことができ、主語が超越的述語面に接觸することを積極的に示すものである。此故に超越的述語面の直接なる自己限定と云ひ得るのである。之を主語的方向に於て見れば、自己同一として超越的述語面に接着したものと考へられるが、之を述語面から見れば、述語面自身の直接なる自己限定と云はねばならぬ。自己とは單に自己同一なるものではなく、自己同一

なるものを内に包むものである、自己の中に自己を見るものである。既に私がある
と云ふ如き自覺によつて基礎付けられる超越的述語面の自己限定ともいふべき概
念的知識が成立するとするならば、かゝる具體的一般者に於て主語的なるものと述
語的なるものとを結合する媒介者は如何なる形を取るであらうか。判断的一般者
に於て判断と考へられたものは、自覺的一般者に於て如何に考ふべきであらうか。
自覺とは限定せられた述語面の中に、無限に到達することのできない深い主語的
なるものを見ると云ふことであるとするならば、主語面と述語面とは相對立し、判断的
一般者の意味に於て兩者を含む一般者といふ如きものは考へられないと云ふこと
でなければならぬ。自覺に於て始めて主語面と述語面とに相對立し、而も尙主語的
なるものが、所謂我々の自己として肯定的に考へ得るとするならば、やはり概念的知
識成立の範圍内にあるものとして、兩者の結合を示す所謂媒語面的なるものが限定
せられねばならぬ。私は推論式一般者とは斯くして成立するものと思ふ。かゝる
意味に於て判断的一般者と推論式的一般者とはその性質を異にしたものである。
數學的知識も推論式的と考へられるのは、小語面的所與が何處までも大語面的なる
ものに對立して居るによるのではなからうか。所謂經驗的科學の知識に於ては、我

々の自覺に於て與へられる事實的知識に基いて概念的知識が構成せられるのである。純粹自我の綜合統一によつて我々の經驗的世界が構成せられると考へられるのも之によるのである。

推論式的一般者は述語面の中には無限に到達することのできない主語的なるものを含まねばならない。小語面的限定が成立することによつて推論式的一般者が成立するのである。推論式的一般者の超越的述語面に於てあるもの、即ち眞にその主語となるものは、固より概念的に限定することのできないものであらう。併しそれが自覺的形式に於て小語面的にその内容が限定せられ得るかぎり、概念的知識として推論式的一般者といふ如きものが成立するのである。斯くしてその限定せられた内容は超越的述語面に反映せられて、大語面といふものが形成せられる、即ち我々の認識對象と考へられるものである。それで推論式的一般者は直接に小語面的に自己自身を限定することによつて、間接に大語面的に自己自身を限定すると云ふことができる。推論式的一般者は小語面的に自己自身を限定するのであるが、その内容が大語面的に限定せられると云ふ立場から、推論式的一般者の自己限定を見れば、その媒語的なるものは、時に於てあるものとならなければならない。推論式的一

般者の内容は時間的に自己自身を限定して行くのである。小語面的なるものが、いつも現在と考へられ、その限定の行先が未來と考へられ、大語面的に反映せられた部分が過去と考へられるのである。之に反し小語面的限定によつて推論式的一般者の内容が限定せられるといふ立場から云へば、時は主觀的統一の形式即ち範疇として、之によつて我々の經驗的認識の對象界が構成せられると考へることができ、推論式的一般者に於てその内容を限定する小語面的自覺が、所謂認識主觀と考へられるものである。自己自身の中に無限に深い主語的なるものを見る小語面的自覺が、何等かの意味に於て之に於てある主語的なるものを限定し得るかぎり、認識對象界が成立するのである。即ち自覺の内容によつて種々の認識對象界が成立するのである。無論、既に述語となつて主語とならない述語面に於てある主語的なるものは、到達することができないと云ひながら、自覺に於て主語的なるものが限定せられると云ふのは矛盾と考へられるでもあらう。併し私がこゝに小語面的自覺といふのは尙概念的自覺を意味するのである、知的自覺を意味するのである、此故に小語面的自覺と云ふのである。述語となつて主語とならないと云ふも尙概念的限定に屬するのである。先づ一般概念的なる述語面といふものが限定せられ、之に於て無限

に到達することのでき主語を含むと考へられるのである、所謂有限の中に無限を含むと考へるのである。かゝる意味に於て限定せられた述語面的内容が限定せられた自己の内容である。かゝる限定をなすことを我々は自己の内容を反省すると云ふのである。無論、眞の自己はかゝる限定の中に入り來るものではない、眞の自己はかゝる限定を爲すものである。(私は「知るもの」に於ても多少述べた如く、かゝる立場からカント哲學を論じて見たいと思ふのである)。

大語と小語とが媒語によつて結合せられる推論式的一般者の内容を、大語面に基礎を置いて考へれば、客觀界が時間的に自己自身を限定し行くことが出来る。かゝる考へ方の極限に於て、小語面は單に無内容なる數學的點の如き現在となり、推論式的一般者の内容は無内容なる時に於て現れるものとして、所謂自然界といふ如きものを考へるの外はない。之に反し、小語面の自覺によつて、時の現在が内容を有つに從つて、種々なる意味の經驗界が考へられる。その極限に於て小語面的限定の連續として、之に對し大語面が成立せないとすら考へられる歴史の世界といふ如きものを考へられるのである。此故に歴史の世界に一般的法則はないと考へられる。併し歴史の世界といへども、尙自覺的内容が概念的に限定せられ得ると云ふ意味に

於て成立するのであつて、尙認識對象界に屬するのである。更に小語面が超越的述語面の直接なる自己限定といふ意味に於て如何なる意味に於ても時の中に入りたることなく、従つて何等の意味に於ても働くと云ふことのできない、却つて時を自己自身の限定となす認識主觀といふ如きものも考へられねばならないのである。範疇といふのは、述語となつて主語とならないものゝ自己限定として考へられるのである、之によつて認識對象界即ち主語となる世界が限定せられるのである。カントの純粹自我とは推論式的一般者が述語となつて主語とならないと云ふ意味に於て、自己自身を限定する「私」でなければならぬ。その對象界は、之に於て推論の成り立つ法則の世界である。判断的一般者に於ては、尙此の如き意味に於て主觀といふものを見ることはできない、唯主語は直に超越的述語面に附着して客觀的に物の世界を見るのみである、更に類概念的一般者の如きものに至つては唯性質的なるものを見るに過ぎない。

十

判断は主語と述語との結合によつて成り立ち、述語的一般者に於て主語的なるも

のが限定せられ得るかぎり、概念的知識が成立すると云ふことができる。私は上に主語的方向と述語的方向とを結合する媒語的なるものに就いて述べたが、主語について述語すると云ふことは、一方から見れば特殊が一般に於てあると云ふことを意味する。かゝる意味に於ては一般は於てある場所と考へることができ、特殊は於てあるものと考へることができ。概念的知識成立の根柢には、かゝる關係がなければならぬ。具體的一般者に於ては、かゝる關係が見逃されるのであるが、私は苟も判斷的知識と考へられるかぎり、何處までもかゝる外延的關係が附添ふものと思ふ。事實的判斷の如きものに就いても斯く考へるのである。私はかゝる外延的關係の種々なる變化から、何を説明し得るかを考へて見よう。

普通の形式論理學に於て、内包が増加するに従つて外延が減少せられ、之に反し内包が減少するに従つて外延が増加すると考へられる、概念の外延的關係といふのは特殊が一般に於てあると云ふことを意味するのである、かゝる場合、一般は於てある場所の意味を有するのである。或一つの一般概念を特殊化して行き、所謂最後の種に至るも、尙元の一般的なるものに包まれて居ると考へる時、外延的關係といふものが成立するのである、特殊化の方向と逆の方向に於て成立するのである。我々が或

物を考へるには、その物は何等かの内容を有たねばならぬ、而して或物が内容を有つと云ふには、他との關係に於ていなければならぬ、唯一つのもののみにて内容を有つと云ふことはない。併し關係といふものが成立するには、關係の頂となるものがなければならぬ、頂なくして關係といふものは成立しない。かゝる頂を包み、その關係を成立せしめる場所となること云ふことが、一般概念の外延的意義でなければならぬ。一般概念の内容を特殊化して行くこと云ふことは、裏から見れば一般概念が自己の中に自己を限定することであつて、於てある場所の性質によつて、於てあるものの内容が定まると考へることが出来る。すべて一般者が自己自身の中に自己を限定すること云ふことによつて概念的關係が成立するのである。かう云ふ意味に於て、外延と考へられるものは一般者の直接なる自己限定を現すものと考へることが出来る。判斷的一般者について云へば、個物といふ如きものが超越的述語面の直接なる自己限定を示すものと考へることが出来る。無論、超越的述語面の直接限定といふ如きものが眞に積極的意義を有するには、私があると云ふ如き推論式的一般者の直接なる自己限定によらねばなるまい。單に無内容なる或物は何物でもない、内包的限定を離れた外延的限定といふ如きは無意義と考へられるでもあらう。所謂抽象的概

念といふ如きものに於ては、未だ超越的述語面の自己限定の意義が積極的に現れない、構成的原理といふものが明となつてゐない、向に單なる主語面的統一と云つた所以である。併し單なる内包的關係から、含むとか含まれるとかいふ關係は出て來ない。類と種との關係であつても、内包的に云へば、單なる相異とも云へる。かゝる意味に於ては、類と種とは相對立し、ヘーゲルの如く具體的一般者から見れば、一般も亦特殊と考へることが出来る。内容が主語的に限定せられた一般は、特殊たるに過ぎない、眞の一般概念として特殊を含むと考へられるものは、何處までも特殊と同列的にその内容を比較することのできないものでなければならぬ、此意味に於て超越的でなければならぬ、而も特殊を離れたものではなく、特殊を自己自身の限定として自己の内に成立せしめる場所の意義を有つたものでなければならぬ。唯、かゝる超越的述語面の内容が主語的に限定せられると考へられた時、所謂抽象的概念となり、その述語面的限定が外延と考へられるのである。述語面に構成的意義を含まないから、之に於てあるものは、單にあると考へられるの外ない。

判斷的一般者に於ては、之に反し超越的述語面の構成的意義が現れて來なければならぬ。個物といふのは、一方から云へば主語となつて述語とならないものと云は

ねばならないが、一方から云へば既に超越的述語面自身の直接なる限定といふ意義を有つものである、類概念に於ける種といふ如きものとして考へることはできない、却つてかゝる意味に於て主語となるものを内に含むものと云はねばならない。種として考へられるものは、最後のものと云へども性質として物に含まれるものである、此意味に於ては含むもので含まれるものでない、ヘーゲルの如く個物が或意味に於て一般と考へられるのは之に由るのである。判断の眞の主語となるものは、所謂主語ではなくして却つて述語的一般者である、一般的なるものゝ自己限定として判断が成立するのである。その主語となつて述語とならないとして主語的方向に見られるものは、超越的述語面の自己限定に外ならない。述語とならないとは類概念的な一般者の中に入り來らないと云ふことを意味するのである。而して斯く主語的なるものが超越的述語面の自己限定と考へられると共に、特殊が一般に於てあるといふ外延的意義が失はれる様になつて來る、述語面が場所の意義を失ふ様になる、超越的述語面の代りに、主語的方向に、即ち客觀的に具體的全體といふ如きものが考へられるのである。併し我々が個物的なるものを考へ得るかぎり、それも一般者に於てあるものでなければならぬ。具體的なるものは直に具體的概念ではない、具

體的概念とは具體的なるものを外延として之を包むものでなければならぬ、個物的なるものゝ於てある場所の意義を有たねばならぬ。判断は於てあるものど場所との媒介となり、之に於てあるものは、抽象的一般者に於ての如く單に或物といふ如きものではなく、すべて判断によつて媒介せられたものである。物とか性質とか云ふ如きものがその範疇となり、場所其者は類概念的一般者の如き意味に於て限定することはできない、超越的述語面の直接なる自己限定として意識的に反省して之を限定するの外はない。思惟意識といふ如きものが、かゝる場所を示すものであらう。

(私は判断の様相とは此の如く場所と於てあるものとの關係に於て考ふべきではないかと思ふ、於てあるものどが場所に直接すればする程、判断的知識は必然となるのである)。

推論式的一般者に於てあるものは、單に自己同一なる個物といふ如きものではなくして、自覺的なるものでなければならぬ、廣義に於ける私といふ如きものでなければならぬ、超越的語面が述語となつて主語とならないと云ふ様に自己自身を限定したものである。範疇的限定といふのは此の如き意味に於ける限定に外ならない。無論、自己とか自覺とかといふのは何處までも深い意味に於て考へ得るであらう。

眞の自由我といふべきものは、かゝる一般者に於てあるものでもない、更に深く大なるものに於てあるのである。我々が概念的に自己といふものを考へるには、先づ述語的なるものを場所として限定し、その中に無限に達することのできない自己自身の主語を含むと考へるのである。主語を包む述語が主語と同一であると云ふことから、部分と全體とが同一であること云ふことから、無限の系列といふものは、尙主語的限定たるを免れないが、場所其者がかゝる主語的系列に對して超越的であると考へられる時、自己の中に自己を映す自覺の概念が成立するのである。述語的に場所が限定せられ得るかぎり、知的自覺が成立するのであるが、意志的自覺に至つては、更にかゝる限定をも越えたものである。是故に意志的自覺といふ如きことは、我々の意識を超越することも考へられるが、却つて一層深い意味に於ての自覺でなければならぬ。右の如き意味に於て、知的自覺といふ如きものが成立するかぎり、推論式的一般者が成立し、自覺的なるものが之に於てあると考へられるのである。

推論式的一般者の内容は前に云つた如く小語面的内容によつて定つて來る、小語面的内容とは自覺の内容を現すものである。小語面的内容が大語面に反映せられ、

兩面が相對立すると共に、媒語的なる時によつて結合せられ、一つの推論式的一般者が構成せられるのである。之を大語面的基礎から見れば、自然界と考へられるであらう、之を小語面的基礎から見れば、精神界と考へられるであらう。併し單にあるものとしての自覺、單なる場所としての自覺の立場から見れば、右の如き推論式的一般者の内容は超越的對象とか價值とか云ふ如きものとなる。推論式的一般者に於て單にあるものゝ意義を有する自覺が所謂認識主觀と考へられるのである。自覺とは自己の中に無限の系列を含むものである、併しこの系列と結合し、その中に入り來るものではない、之に對し超越的なる場所の意義を有たねばならぬ。かゝる意味に於ての自覺は媒語的なる時を超越したものである、媒語的時によつて推論式的一般者の内容として構成せられるものではなく、推論式的一般者に於て直にあるものでなければならぬ、恰も判斷的一般者に於て主語となつて述語とならないものに相當するのである。而して判斷的知識がかゝる基礎によつて成立すると考へられる如く、自覺によつて推論式的眞理が立せられるのである。

推論式的一般者の超越的場所に於てあるものは、自覺的なるものでなければならぬ。かゝる自覺者が自己自身について述語し、自己自身を限定するかぎり、尙小語面

的主語の意義を有するものとして、之によつて推論式的一般者の内容が限定せられる。併し自己自身は超越的場所に於て直にあるものとして、その中には入つて來ない。之を限定せられた推論式的一般者の内容から見れば、かゝる内容を限定するが、而もその中には入り來らない構成的認識主觀となる「時」を範疇となすが「時」の中に入り來らない單なる綜合統一の認識主觀と考へられる。併しそれが直に超越的場所に於てあるものとしては、又單に構成的なるのみならず、知識内容を與へる直覺的主觀でもなければならぬ。大語面的對象界に向いた方面に於ては構成的と考へられるが、小語面的に直にあるものとしては、自己自身の内容を直覺し、之を大語面的對象界に反映するものでなければならぬ。眞の認識主觀は一方に構成的意義を有すると共に、一方に直覺的意義を有せねばならぬ。推論式的一般者に於ける小語面的自覺は單にあるものとしては、所與主觀の意義を有し、自己自身を媒介するものとして、構成主觀の意義を有するのである。

概念的知識の成立には、主語的方面と述語的方面とを結合するものがなければならぬ、即ち媒語的なるものがなければならぬ。併し判断とは一方から見れば、主語が述語に於てあると云ふことであり、その根抵に於てあるものと於てある場所との關

係がなければならぬ、即ち外延的關係がなければならぬ。此の如く主語的なるものが直に述語的なるものに於てあると云ふことが、所謂直覺とか直觀とか云ふことである。是故に直覺とは媒介なき判断と云つてよい、否媒介者が潜在的状态にあると云ふべきである。類と種との關係より成る所謂抽象的概念の體系に於ては、その中に眞に主語となるものを含まない、眞に主語となるものは超越的述語面に於てあるのである。かゝる超越的述語面が所謂知覺といふ如きものと考へられるのである。未だ場所と於てあるものとの間を媒介するものはない、知覺は全からざる判断と云ふことができる。普通には知覺の如きものが直覺と考へられるが、自己自身の中に判断を含まない、即ち自己自身を媒介することのない直覺は、未だ眞の直覺ではない。眞の直覺は自己自身の中に主語を含み、自己自身を媒介するものでなければならぬ、即ち自覺的なるものでなければならぬ。知覺といふ如きものは、かゝる自覺的意識面の限定せられたものとしてのみ考へることができるのである、主語面的に限定せられた述語面である。述語面の中に無限に達することのできない主語的なるものを見る時、所謂自覺となるが、その中に見らるゝ主語的なるものが限定せられたものと考へられるかぎり、かゝる述語面が知覺的意識面と考へられるのである。元

來意識面自身は斯くして限定し得べきものではない、此故にその底には尙無限の行先が残される。かゝる行先は斯くして限定せられた意識面の中に包むことはできないものであるから、かゝる意識面は外部知覺と考へられるのである。内部知覺といふのは、述語面がその中に無限に達することのできない主語的なるものを包むに於て始めて云ひ得るのである、即ち自覺的意識面に於て内部知覺といふ如きものが成立するのである。それで所謂知覺面とは自己自身を媒介することのできない不完全なる超越的述語面であり、その内に構成的意義を有せないから、之に於てあるものは單に於てあるものであり、判斷的知識としては所謂種と類との如き抽象的概念の體系が成立するまでいある。抽象的概念とは、述語となつて主語とならないといふ超越的述語面の中に含まれた無限に達することのできない主語的なるものが限定せられたものとして、前に云つた如く述語面が主語的に限定せられたものと云ふこともできれば、又却つて眞に主語的なるものを包み得ない述語面と云ふこともできる、限定せられた述語面的内容と考へることもできる。是故に抽象的概念は單に述語となるものと考へられるのである。要するに判斷的一般者にして、主語的方向に於て主語となつて述語とならない超越的主語に達することはできない、述語の方

向に於て述語となつて主語とならない自覺面に遡することのできない中間的一般者が、抽象的概念と考へられるのである。故に一方からは主語として見ることもできれば一方から述語として見ることもできる。而して具體的概念の立場から見れば、之に對して超越的述語面に於て知覺的意識面が見られ、超越的主語面に於て客觀的對象が考へられねばならぬ。

數學について十分の知識を有せざる私は、未だ數について論ずることはできないが、數といふものも超越的述語面に於てある一種の「有るもの」であると思ふ。併しそれは種と類との關係から成る單なる類概念に於て考ふべきものでもなく、又單に判斷的一般者に於てある個物として考へ得べきものでもない。數の世界といふのはやはり推論式的一般者の超越的述語面に於てあるものとして、所謂認識主觀に對する一種の客觀界でなければならぬ。數の世界は法則の世界、推理の世界である、否最勝義に於てかゝる世界と云はねばならぬ。かゝる意味に於ては、數の世界は所謂經驗界とその論理的意義を同じうするのであるが、唯その異なる所は小語面的所與にあるのである、その小語面的所與が直に構成的であるのである、小語面と大語面とが接觸して居るのである。推論式的一般者としては小語面と大語面とは何處までも

相對立するものであり、その間に媒語的なる「時」が考へられねばならぬのであるが、その時が過現、未の傾斜なく、いつも現在と考ふべきであらう。小語面的所與の根抵となる私は、單に自己の中に主語と述語とが合一せる自己同一なるものを見る私である。右の如くにして數の世界は直覺的所與の世界であり、純なる論理的思惟の對象界と云ふことができるであらう。

十一

以上、私は判斷的一般者を中心として、一方にその不完全なる類概念的、一般者を考へ、一方に更に判斷的一般者を包む推論式的一般者を考へ、之によつて種々なる認識對象界を考へて見た。我々の概念的知識を論ずるには、判斷を中心とせなければならぬのであるが、始にも云つた如く概念的、一般者とは元來廣義に於ける私である、判斷とは自覺の一過程に過ぎない。何處までも述語となつて主語とならない私が主語的に自己自身を限定するかぎり、判斷的知識が成立するのである。我々は自覺の立場に立つて、更に此立場から判斷を見直して見ることができると思ふ。

我々の自己は何等かの意味に於て判斷の主語となるものでもなく、又所謂認識主

觀に止まるものでもない。知的自覺は尙眞の自覺ではない、眞の自覺は意志の自覺、自由我の自覺でなければならぬ。最も深い自己から見れば、判断といふ如きものは自己表現の一種に過ぎない、而もその最も外面的なる一様式である。判断が自己を限定するのではなく、自己が判断を限定するのである。知的自覺が成立するには、述語面的なるものが限定せられ、之に於て無限に達することのできない主語的なるものを含むと考へるのである、知的自覺には尙場所が限定せられねばならぬ。併し眞の自己はかゝる意味に於て限定せられるものでもない。是故に眞の自己の深い内容は所謂認識對象界の内に盛り切れるものではない、所謂認識對象界に於てある實在界は、その表現となり、象徴となるのみである。表現の世界は最も深い自己の自覺によつて成立するのである。かゝる立場から見れば、認識對象界とは最も外面的なる表現の世界に過ぎない。意志の對象界といへども、尙認識對象界に即して、その裡面に於て考へられるのである。思惟を裏から見たものが意志となる、實在界に即した表現が所謂意志の實現である、意志作用といへども、尙表現作用の弱きものたるを免れない。

自覺的「一般者の種々なる構造については」述語的論理主義」と題する次の論文に譲る。